

# 子ぎつねへレン

2006(平成18)年4月16日鑑賞〈道頓堀角座〉



監督＝河野圭太／出演＝大沢たかお／深澤嵐／松雪泰子／小林涼子／藤村俊二（松竹配給／2006年日本映画／108分）

……動物と男の子の心の交流を描いた涙と感動の物語、というのが春休みの親子連れを狙ったこの映画の謳い文句。しかし、視覚、聴覚、味覚という三重苦の子ぎつねが生きていくために闘う姿は全く見えず、少年のやさしさが目立つだけ。したがって、人間へレン・ケラーとサリヴァン先生との壮絶な闘いが感動を呼んだホンモノのへレンのお話とは大違い……。[尊厳死]の議論が高まる今、こんな甘っちょろい、キレイごとではなく、もっと本音で切り込んだ議論とストーリー構成が必要なのでは……？

## 第3章

身近な人を大切にしたいくなる

### ケチはつけないが……

この映画の主人公は、視覚、聴覚、味覚という三重苦の「子ぎつねへレン」と、道端でうずくまったまま動こうとしないこの子ぎつねを拾いあげた8歳の少年、大河原太一（深澤嵐）。またそのテーマは、少年と子ぎつねとの心の交流と悲しい別れ。そして、そのストーリーに絡み、太一との間で生命論争（？）や医師論争（？）を展開するのが、北海道で矢島動物診療所を経営する獣医の矢島幸次（大沢たかお）。

ここからわかるように、春休みに公開されたこの映画は、最初から子供連れの観客が、劇場を涙と感動でいっぱいにするのを狙ったもの。したがって、こんな「誰からも愛される」映画に、あまりケチはつけないのだが……？

### ケチ論その1——同じへレンでも大違い……？

へレン・ケラーとサリヴァン先生の物語は、「涙と感動の物語」以前に、その

闘いの激しさに震えたもの。見えない、聞こえない、話せないという三重苦の少女ヘレン・ケラーに対して、99%の人たちはやさしく接しただけ。それが最大公約数として、最もあるべきヘレンに対する対応策と考えられたわけだ。

ところが、サリヴァン先生だけは、まるで犬や猿を訓練するのと同じようにヘレンを「訓練」し、何度も何度もぶつかり合いの闘争をくり返した。これは「教育」などというキレイごとではなく、精神力はもちろん、それ以上にまさに肉体と肉体とのぶつかり合いの極限まで追及したバトルそのものだった。それに比べれば、同じヘレンでも、この映画の甘っちょろいこと……？

## ケチ論その2 —— 2人の議論は中途半端……

子ぎつねヘレンの「扱い」をめぐる、スクリーン上では、何度も太一と矢島との間の「議論」が展開される。しかし、私の目にはそれは中途半端で、消化不良気味……？ 矢島の「死んだ方が幸せかもしれない」の言葉に対する太一の反論は、「それでもお医者さんですか！」というもの。たしかに真正面からそう言われれば、医者の方が分が悪いのは当然。

また、手術を受けるためには体力をつけることが必要と言われた太一の懸命の努力によって、ヘレンの体重が増えたため、ヘレンは獣医大学の上原教授（藤村俊二）の精密検査を受けることになったが、それはヘレンにとってホントに幸せなこと……？

## ケチ論その3 —— ヘレンの「延命治療」は？

ヘレンは、太一が拾いあげなければ、2日後には死亡していたはずらしいから、結果的にヘレンは約1カ月間長生きできたことになる。それは喜ばしいことだといえどたしかにそうだが、それは、誰にとって喜ばしいこと……？ さらに突っ込んで言えば、その間の費用（治療費）は、一体誰が負担したの……？ そして、仮にヘレンに使った時間を他にに向けていたとすれば、他にどれくらいの医療行為ができていたの……？

このように考えていくと、そう単純に「1カ月間生き延びることができてよかったね」とばかり言ってもらえないのでは……？ もっとも、そんなことばかり考

える俺って、かなりヒネクレ者……？

## 時あたかも「安楽死」「尊厳死」の議論が……

この映画では、結果的にヘレンは、太一が拾いあげてから33日間生き延びることになった。また、その死も、「野垂れ死に」ではなく、お母さん役の太一に見守られての美しいものになった。しかし、そのことにどこまで意味が……？

時あたかも、富山県射水市民病院で外科部長が末期患者の人口呼吸器を外したという問題が報道された。以降、「安楽死」「尊厳死」の議論が日本列島を覆い、「安楽死」を認めるべきと主張する「日本尊厳死協会」と、「安楽死」を認めるべきではないと主張する「安楽死・尊厳死法制化を阻止する会」との対立が顕著になっている。

もちろんこの両者の主張には、それぞれもっともな面があり、一方が正しく、一方が誤りだと断定することが難しいもの。それは認めつつ、私は「安楽死」「尊厳死」を認める立場に立っているが、さて、あなたは……？

## ケチ論その4——こんな母親でいいの……？

太一の母親、大河原律子（松雪泰子）は、世界中を飛び回っているカメラマン（ウーマン）という設定。そして、今日は東京からの引越しの日。律子が「世界」へ羽ばたくために、太一は北海道の矢島動物診療所に預けられることになるらしい……？

律子は旅行から帰れば矢島と結婚するつもりらしいが、律子の話しぶりを聞いていると、それもかなり独りよがりのよう……？ 太一の学校は？ 春休みの過ごし方は？

どうも律子は、そんなことを全然気にしていないらしいが、お母さん、本当にそんな生き方で大丈夫……？

映画の中では、太一からヘレンに対して「お前の母親も自由人か？」とえらく文学的に語られるが、そんな次元の問題ではないのでは……？

教育基本法の改正問題が、いよいよ具体的になっている現在、こんなワガママで自己チューの生き方では、母親失格……？

## 矢島病院の経営は……？

矢島は中学生になる娘の美鈴（小林涼子）と2人で生活しているが、そもそも人と接することに不器用であるうえ、金のための治療は大キライという性分だから、金儲けは全然ダメ。しかもその診療所は、ホントに森の奥にあるから、患者（？）の誘致は大変。人ごとながら、その病院の経営は大丈夫……？ 自由競争の嵐が押し寄せ、都市と地方の格差が一層広がっている現在、こんな山奥の動物診療所の存続は難しくなるはずだ……。

## ガキのマナーの悪さにカリカリ……

この映画の観客には当然親子連れが多いが、映画館の中だけでも、家庭教育の良し悪しが如実に表れるもの。客席はほぼ30%の入りだったが、1組、目を引いたのは、母親と小学生の男の子の2人連れ。男の子はあまり映画に興味がないのか、何度も足を投げ出したり、カタカタと音をたてながら姿勢を変えたりと大忙しのうえ、氷の入ったジュースを、何度も大きな音をたててすすっていた。その周りを気にしない「小皇帝」ぶりにまず啞然……。そのうえ、映画終了後、そのジュースはカップホルダーに残されたまま。

「こんな母親がいるから、世の中ダメになってしまうのだ」と思わず叫びたくなってしまうが、さてあなたはと思う……？

## 総評

もともと私は、この映画を観る気は全然なかったのだが、ある依頼者の女性が「どうしても観たい。予告編を観ただけで涙ぐんでしまった」と言っていたので、やっぱり観ておこうと思い、日曜日に観ることを決めていた『タイフーン』と『ファイヤーウォール』のうえに無理にプラスして観たもの。しかし、結果はここに書いたように、あまり納得できなかったもの。少年と動物との涙と感動の物語としては、状況設定もストーリーの進め方も少し甘すぎるのでは……？

2006(平成18)年4月19日記